

<b>Title</b>	「東日本大震災からの再生に向けて」(Part2)実施結果：アンケート集計結果の概要(総合研究所News：臨床死生学研究シンポジウム)
<b>Author(s)</b>	聖学院大学総合研究所
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.5, 2012.3：43-47
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3867">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3867</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

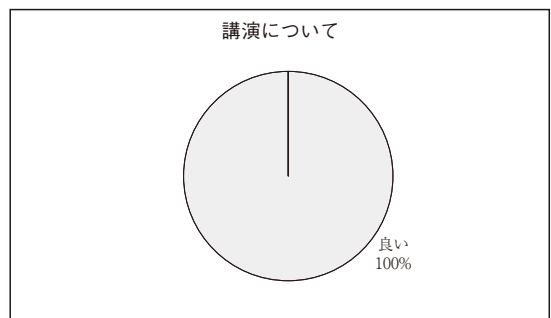
大西 奈保子（東都医療大学ヒューマンケア学部看護学科 准教授）

質疑応答

司 会 平山正実（聖学院大学大学院教授）

【結果の概要】

- ・参加者は81名。内、アンケート回答者は45名。
- ・講演について、「良い」という意見が100%と高い評価だった。
- ・自由意見では、「つらい中話して下さり、心打たれた」「聖学院ならではの開催」など。



臨床死生学研究シンポジウム  
東日本大震災からの再生に向けて (Part2)  
実施結果—アンケート集計結果の概要—

わたしたちは突然の自然災害に見舞われ被災された方々の悲しみにどのように寄り添い、どのように支援したらよいのでしょうか。被災された方から直接お話をうかがい、また大学で被災者を教えた立場にある教員をお招きしました。お二人の「語り」をてがかりに、グリーンケア（悲嘆援助）のあり方をみなさまとごいっしょに考えてみたいと思います。

日 時 2012年2月10日（土）14：00～16：30  
場 所 聖学院大学ヴェリタス館教授会室

【プログラム】

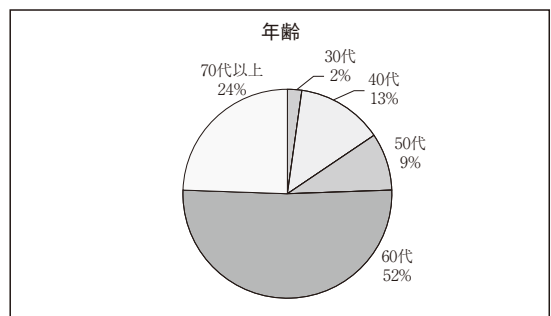
挨拶 阿久戸光晴（聖学院大学理事長・学長）

講師紹介 平山正実（聖学院大学大学院教授）

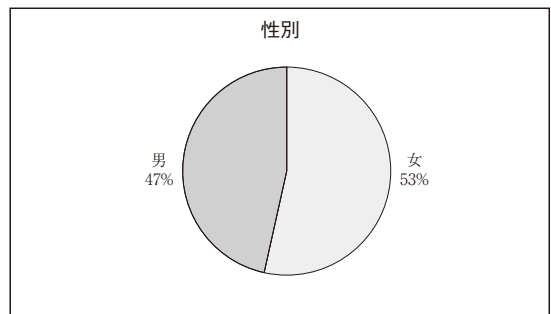
講演1 「天国の娘 生きた証し」

尾形 妙子（医療法人社団 仙石病院看護部長）

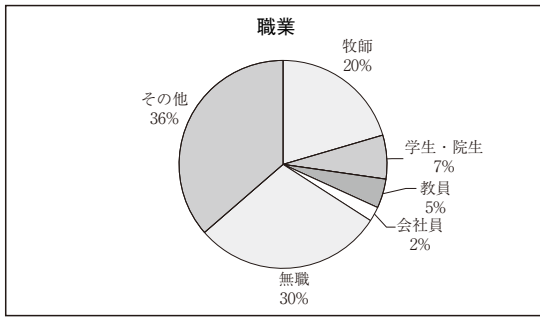
講演2 「東日本大震災の遺族とのかかわりを通じて、自身の悲しみとケアのあり方を考える」



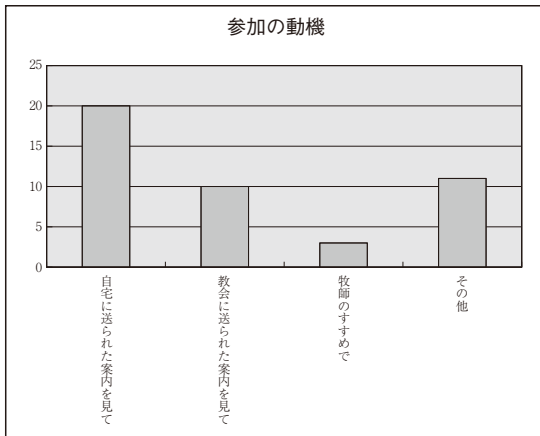
\* 回答者の年齢は60代が半数を占めた。



\* 性別は、女性男性がほぼ同数だった。



\*職業は「牧師」が最も多った。「その他」としては「ヘルパー」「看護師」「ケアマネジャー」「チャプレン」など。



\*参加の動機として、「自宅に送られた案内を見て」が最も多く、次に「教会に送られた案内を見て」となった。「その他」として「学内のチラシを見て」「前回の講演で知って」「朝日新聞を見て」など。

## 自由意見

・今回のお二人の講演をうかがい、以前に父親を自殺で失った女子大学生の告白を聴いた時のことを思い出しました。昨年の東北大震災で肉親や知人を失い、悲しみに暮れている人の話を（そのような悲しみを味わっていない）こちら側がどう聴いて受け止めればいいのか…と迷いました。尾形妙子さんの「日常は当たり前ではない」という言葉が印象に残りました。亡くなった次女の娘さんが今も生きている者に働きかけておられるのかなと感じました。ご生前は立派な志をもっておられたのだと思います。「遺族が（こころゆくまで）悲しむ権利」というものをこの国で広めたいと思いました。

- ・尾形さん、本当によく話をして下さいましてありがとうございました。私も35年前に5才の息子を一方的な過失による交通事故で亡くしました。その経験を胸に現在大学院で学べるようになりましたが、悲しみが消えることはありません。尾形さんが話されたように「家族を突然失ったことに意味はないのです」と25年間思い続けてきました。あるきっかけがあってキリストに出会いました。この神に出会わせるために息子が亡くなったのだと思える時がありました。今は息子と再会できる日を楽しみにして、生きている限り誰かの役に立てる人生を送りたいと思っています。正直、今でも息子を失ったトラウマは消えることはありませんし、消したくないと思っています。ただ、尾形さんどうぞ思い切り泣きながら生きて下さい。いつかその意味に出会えることを願っております。
- ・津波のとき、物につかまって漂流した恐怖の体験から精神に異常をきたした方のご家族から話をうかがいました。やっと助かって、その後の状態は悲惨だったりします。そうした方々のための支援の手が差し伸べられるよう願ってやみません。誰でもが気軽に自分の気持ちを吐露できる場—（ピアカウンセリングでも可）が現地にあったらと思います。
- ・三人のご家族を一度に亡くされて、どんなにかお辛いことと思います。そんな中お話くださり、心打たれました。沈んだり、立ち直ったりを繰り返しておられることでしょう。それを支えておられるのはご主人やご長男、志保さんですね。どうぞお元気で生き抜いてください。あ



仙石病院看護部長 緒方妙子氏



東都医療大学准教授 大西奈保子氏

りがとうございました。

- ・私のような障がいと闘っている者でも被災された方々に寄り添うことができるのだと1人でも多くの方々に知っていただきたいし、お話などをする機会をいただけたらと思う次第です。
- ・尾形さんの話で、当時①感情を遮断し、律する努力をした。②生きていたか、死んでいたか自覚できなかった。③悲しい感情がなかった。④現実が見えなかった。ということを言われていた。私がかかっていた方のことがわかったように思う。今もその状態が続いているように見えて、かわり続けていく事の大切さを再確認させられた。
- ・予期せぬ未曾有の大災害、自然を前に人々は何もできない。私も何か役に立つことがあるのではないかと看護師ボランティアとして現地に連絡をしましたが、1人で来られても対応が難しいとのことで子どもたちを連れて（ボーイスカウトの長男とスカウト4名）5月の連休に、そして8月に共に4泊5日で現地ボランティアを行いました。しかし、まずこの地に降り立った時の無力感、アルバムや現地の方々の話を聞く中で、自分は何もできないことを改めて実感しましたが、「遠いところを私たちのためにありがとうございます」と声をかけられ、私自身くじけそうな気持ちを支えてもらいました。ボランティアに参加した人々にもPTSD（自分は何もできなかった無気力感、現場の悲惨な状況）を発症した方もいらっしゃると思います。わたしも子どもたちには注意をはらい参加しました

が、その子どもたちに“大丈夫”と声を掛けられた時を忘れません。（アルバムをみつけ、涙が止まらず声を出さず茫然と立ち尽くしていた時）私は皆に助けられました。また、時として我々看護師は人に寄り添い共感するかたわら、外側から援助していくことの大切さ、客観的に看護する心の鍛錬が必要だと思いました。

- ・本日のお二人のお話は、日常生活の中の人と人との関り方の基本となる考え方が散りばめられているように感じました。ひとつひとつの言葉を頭の中で推敲しながら、生活の中で伝えていくつもりです。参加してよかったです。
- ・復興支援がお祭りのようになってきているという言葉が心に残りました。本当に辛い思いの中にある方々にどう関わっていったらよいか、深く考えさせられました。今回参加させていただき感謝します。
- ・私にも娘と息子がいますが、いることが当たり前であり、突然手の届かない場所に行ってしまうというのは、信じられないし、信じたくない、受け入れられないと思う。そのような言葉では言い表せない悲しみ、苦しみの中、耐えながら話したくないことを語っていただきまして、本当にありがとうございました。日常は当たり前ではない、今を大切にしなければならぬことを改めて実感しました。
- ・尾形妙子先生と大西奈保子先生がまだまだ心の整理がつかない中（当然のことと私も感じます）を心を込めてお話して下さったこと、メッセージ（お気持ち）を大切にしながら生き



東日本大震災に直接関わった方の「語り」からグループケアのあり方を見つめた。

ていきたいと思います。「2011.3.11」を忘れないこと、ずっと被災地や被災された方々のことを思っていきたいと思います。「どのように寄り添っていけるのか？」私も一緒に考えていきたいです。Being=覚悟と忍耐をもって…その中で希望が生まれながら、かかわり続けることの大切さを深く実感することができました。今日はこのような大切な出会いの場の機会を与えてくださった聖学院大学の先生方、平山正実先生、皆様、尾形妙子先生、大西奈保子先生に心より感謝を申し上げます。本当に今日はありがとうございました。

- ・私は今、脳腫瘍のある身であるが、お二人の話をお聞きして、癒され、浄化されました。力強いメッセージをいただきました。そして、亡くなった人々に私たちの生き方が見つめられているという思いを強くしました。亡くなった人々のことはいつまでも忘れないように大切にしたい。ありがとうございました。
- ・被災された方の生の声を聞くことが出来て、とても教えられることがありました。これから多くの被災者のため、また近くにいる被災地から越してきておられる方への触れ合いにも大変参考になるお話でした。感謝しています。
- ・今回のお二人それぞれが、この期間ご自身の気持ちをよく見つめ、向き合ってこられ、それをこの機会に言葉で伝えていただき、深く感銘をいただきました。
- ・被害にあわれた方の生のお言葉、お話を始めてお聞きする機会を得ました。テレビのニュースとは違う、重み、厳粛さを感じました。志保様の愛唱句に希望を見出す思いです。尾形妙子様と大西奈保子様のこれからのお働きに、人生に神様の豊かな祝福と平安がありますように。
- ・同じ年代の方のお話…まだ一年経っていないところでの辛い体験を話していただき、ありがとうございました。よくお話を皆さんの前でされ、ご立派です。私も子どもを亡くしたとき、ここまで元気になるにはとても時間がかかりました。ご自分のペースでよいのです。ゆっくり癒してください。尾形さん、お仕事をされていてよかったです。

お祭りムード…そうですね、そうかもしれません。私たちは、TVや新聞の一方的な報道しかわからないから。

- ・グリーフケアとは共感であり、泣く涙がそのよい証だと思った。グリーフケアの概念を超えてこの現実に向き合わざるを得ない者こそ真の共感者ではないだろうか。
- ・人の前でお話をするとはとても勇気のいることだと思いました。貴重なお話を聞かせていただき胸が詰まる思いです。どうもありがとうございました。
- ・日常は決して当たり前ではないということ。失ったものは大きい、いただいたものも沢山ある。葬儀で気持ちをある程度整理できた（悲しさよりほっとした）とのこと。東日本大震災を忘れないことが大事。
- ・私も三年前に息子が海で突然亡くなりました。遺体に対面することができたことは、後になって大きな支えとなっております。死の確認は天国へ迎えいれられている安心となりました。東日本大震災では未だに遺体が見つからない方が大勢おられます。自分もそういう立場であったら、未だ心はさまよっているのではないかと何回も思いました。尾形さんが葬儀によって心が少し整えられたことをお聞きし、深く共感いたしました。勇気を出してお話くださったこと、ありがとうございました。
- ・被災された生々しい現実、心苦しく、心打たれました。そしてグリーフケアの現実をもあらためて感動しました。本当に困難な課題を突きつけられ、心動かされました。これが現実のグリーフケアのあり方なんですね。
- ・被災者の家族から深い悲しみ、苦しみを与えられ、感謝です。私なりにこれからもボランティアに参加したいと願っています。
- ・被災された方々、亡くなられた方々のためにカトリック信者として（人間として）毎日心をこめて祈っています。
- ・悲しみの中からのお話を感謝いたします。本当に希望と絶望の中に皆あることを思い知らされています。神様が包み守ってくださるよう祈ります。

- ・「関わり」続けることの大切さを知りました。とてもよい講演でした。聖学院ならではの開催に拍手です。
- ・被災者の家族とその関係者自らの声で聞く機会に恵まれ、非常に感動した。感銘を受けた。
- ・ありがとうございました。貴重な体験のことは感謝です。
- ・心の話、他人の心を付度して話すことは特に難しいと思った。
- ・とても聞いていてつらかった。何とって良いか言葉が出ない。